

読み聞かせ活動を通した〈交流力〉の育成

マユー あき 岩田 英作
(総合文化学科)

Cultivation of Students' Interpersonal Communicative Ability
through Picture Book Reading to Children

Aki MAHIEU, Eisaku IWATA

キーワード：交流力 interpersonal communicative ability
絵本 picture books 読み聞かせ reading to children

1. はじめに

2005年冬、松江市立病院小児科病棟に入院する子どもたちを対象にボランティアで始めた絵本の読み聞かせ活動は、その後、正規の授業「読み聞かせの実践」に引き継がれ、現在3年が経過したところである。その間、実践の場は少しずつ移りながら、現在は大学近隣に位置する松江市立幼保園のぎ、松江市立乃木小学校の2ヶ所に定着しつつある。特に乃木小学校では、授業とボランティアを組み合わせる年間を通して活動している。また、「読み聞かせの実践」に加えて、卒業プロジェクト「おはなしゼミ」も立ち上がり、短大の2年間を通して読み聞かせの活動を行なう機会を学生に提供できるようになった。活動の場も広がり、2008年秋には島根県立美術館において読み聞かせのボランティア活動を行ない、2009年2月には〈絵本ワールド in しまね〉に参加する予定である。

子どもたちに心の栄養となるお話をたくさん味わってもらいたい。そういう願いから、私たちはこの一連の読み聞かせ活動を、「おはなしレストラン」と呼んでいる。「おはなしレストラン」が開店して3年、店舗は広がり、店の名も少しずつ知られるようになって

た。しかし、より重要なのは、「おはなしレストラン」のシェフである学生たちが、この店で働き甲斐を感じているかどうかである。

「おはなしレストラン」での読み聞かせを通して、学生たちに身につけてほしいもの。私たちは、それを、〈交流力〉という言葉で言い表している。本稿では、2007年度以降の読み聞かせ活動を振り返りながら、この活動が、学生たちの〈交流力〉の育成に貢献したかどうかを検証し、合わせて今後の取組を展望したい。

2. 読み聞かせ活動「おはなしレストラン」

- 2007年度から現在までの歩み

読み聞かせ活動の2005年度から2006年度に渡るボランティアから授業立ち上げまでの経緯については、マユー・岩田(2007)^{*)}においてすでに報告している。本節では、それに続く2007年度から現在までの歩みを振り返ってみる。(表1参照)

1) 2007年度

2007年4月、統合・法人化により、本学は島根県立大学短期大学部松江キャンパスとなり、同時に学科

再編によって総合文化学科が新しく発足した。それに伴い、それまで文学科の専門科目であった「読み聞かせの実践」も、この新学科の言語文化に関わる授業の1つという位置づけのもとで新たなスタートを切った。

学生の実践の場は、2006年度に引き続き松江市立病院小児科病棟、松江市立幼稚園のぎ、そして松江市子育て支援センターに代わって新たに松江市立乃木小学校が加わり、3カ所となった。子育て支援センターでの実践をやめたのは、前掲のマユ・岩田(2007)でも触れたように、実践の場として2つの難しい点があったからである。1つには、子どもの年齢から来る問題である。対象となる子どもたちは0、1、2歳児が中心で、読み聞かせが思うように進められないことが多かった。もう1つは、読み聞かせの場としての適切さに関わる問題である。遊戯室の一角を使っただけの実践であったため、それ以外のところでは、読み聞かせとは全く関係なく遊んでいる子どもたちがたくさんおり、聞き手の子どもにとっても、読み手の学生にとっても、絵本に集中することが非常に難しい環境だった。このような事情で、私たちは2007年度を迎えるに当たり、新たな実践の場を探す必要に迫られていた。

読み聞かせの対象を小学生まで引き上げ、学生が読む絵本の幅を拡げたいと以前から考えていたこともあり、新年度が始まる直前に、思い切って松江市立乃木小学校に実践の受け入れをお願いに行った。幸い、乃木小学校からはすぐに快諾を得ることができた。加えて、その直後、本学が幼稚園のぎと乃木小学校と三者連携に関する協定を締結するという大きな後押しもあり、私たちは乃木小学校での朝の読み聞かせの時間を学生の新たな実践の場として得ることができた。

それから、この年、幼稚園のぎと乃木小学校での学生の実践について、クラス担任の先生方による評価を新たに導入した。学生が自分の実践に対して客観的に評価してもらうことは、活動を自己満足に終わらせないためにも、また、よりよい実践のためにも欠かせない。こちらで準備した評価用紙は、多忙な先生方の負担にならないことを第一に考え、あえて非

【2005年12月～2006年2月】

課外活動ボランティアとして松江市立病院小児科病棟でスタート

参加者： 文学科2年生21名

【2006年度】

文学科の専門科目「読み聞かせの実践」

(1年前期開講、2時間1コマの演習、1単位)

受講者： 国文・英文専攻1年生 34名

実践先：

松江市立病院小児科病棟(夏休みに活動)

松江市子育て支援センター(授業の時間帯で活動)

松江市立幼稚園のぎ(授業の時間帯で活動)

【2007年度】

総合文化学科の専門科目(文学ジャンル)「読み聞かせの実践」

(1年前期開講、3時間1.5コマの演習、2単位)

受講者： 29名

実践先：

松江市立病院小児科病棟(夏休みに活動)

松江市立幼稚園のぎ(授業の時間帯で活動)

松江市立乃木小学校(水曜日8:20～8:30)

*2,3学期...受講者の有志によるボランティア

【2008年度】

受講者： 27名

実践先：

松江市立幼稚園のぎ(授業の時間帯で活動)

松江市立乃木小学校(水曜日8:20～8:30)

*2,3学期...受講者の有志によるボランティア

2年「おはなしゼミ」のゼミ活動

表1 「おはなしレストラン」- 始まりから現在

常に簡単なスタイルにしている。小学校では〈読み聞かせ〉、〈子どもに向き合う姿勢〉、〈態度・マナー〉、の3項目、幼稚園ではそれに〈つなぎ遊び〉を加えた4項目について、それぞれを3段階でチェックしてもらい、可能であればコメントを書いていただくようになっている。ある学生が実践を振り返った感想の中で次のように書いているとおり、評価はそれを受け取る学生にとって、自分の実践に対する反省材

料を提供してくれると同時に、大きな励ましとなっている。

「先生方の評価はとても参考になりました。自分ではわからない面がよくわかりました。駄目出しても何でも反応が返って来るのはうれしいことなんだと気付かされました。」(M.O.)

乃木小学校での朝の読み聞かせは、授業として取り組んだ1学期に引き続き、2・3学期も本科目を受講した学生の中の有志が、ボランティア活動として読み聞かせを続けた。このことは大学でも評価され、2007年度の社会活動部門における学長表彰を受けた。

2) 2008年度

今年度、私たちは一つの苦しい決断をすることになった。この読み聞かせ活動の出発点である小児科病棟での実践を、見合わせることにしたのである。小児科病棟では、2006年、2007年の2年間、授業としての実践を夏休み中に行なってきた。しかし、実態は、対象となる子どもがいなくて、訪問しても活動できないことが思った以上に多かった。そして、そのような場合には大体いつも、せっかく来てくれた学生に申し訳ないと、田中雄二小児科部長自らが、ご自身大変お忙しいにも関わらず、新生児室などに学生

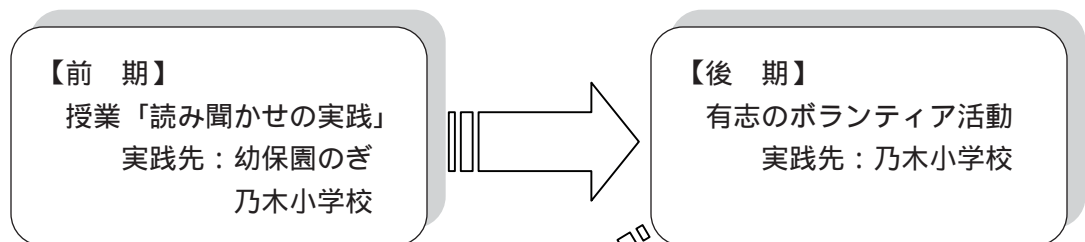
を案内して下さったりした。私たちの気持ちとして、これ以上、田中小児科部長に迷惑は掛けられないという思いがまずあった。また一方で、幼保園と小学校における実践が、望ましい形で定着してきたという現実もあった。私たちは田中小児科部長を訪ね、率直にこちらの気持ちや事情を説明し、今後のことについて相談してみた。偶然と言うべきか、ある程度予想されていたことと言うべきか、田中小児科部長の思いも私たちと同じであった。これまでのように定期的に訪問して活動することは、両者合意のもとでしばらく見合わせるようになったのである。

こうして、実践は幼保園のぎと乃木小学校の2ヶ所で行なうことになった。乃木小学校での読み聞かせは、前年度と同様、1年前期の授業を終えた後も、希望する学生により2・3学期もボランティアとして引き続き行なっている。

また、今年度より2年生の卒業プロジェクトのゼミの1つとして「おはなしゼミ」を立ち上げ、そのゼミ生がゼミ活動として、乃木小学校での読み聞かせを1～3学期の間行なうことになっている。

このように、授業とボランティアを組み合わせながら、短大での2年間を通して読み聞かせを行う機会を設けるという形が整うこととなった。(図1参照)

1年



2年

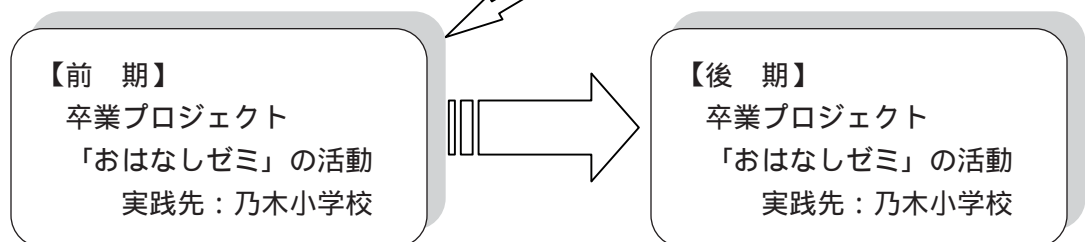


図1 短大2年間の読み聞かせ活動の流れ

3. 「読み聞かせの実践」における学び

総合文化学科では、「知識」、「技能」、「実践」の三位一体を「人間力」として理念に掲げているが、「読み聞かせの実践」における「人間力」育成の内容を構造化すると下記の図2のようになる。絵本に関する知識や読み聞かせの技能など、「知識」と「技能」についてはおもにキャンパス内で学び、地域での実践においては、人びとと直接向き合い、円滑な人間関係を構築できる「交流力」の育成を目指す。「交流力」の核には、自己形成および人間関係の基盤となる「ことばの力」の育成を置く。と同時に、挨拶・お辞儀などの基本的なマナーや、時・場所・状況を踏まえた振舞い方を身につけることによって、社会で通用する「交流力」を培う。

本節では、「読み聞かせの実践」の活動が学生たちにとって実際どのような学びの経験となっているかについて、彼らが授業を終えて綴った感想文をもとに探してみたい。

1) 学内での模擬実践

「まさか自分が読み聞かせ活動をするなんて思ってもいなかった。どちらかというと、子どもは苦手だし、人前に立つことが苦手だからだ。だから、ちょっ

と挑戦してみよう！という感じでこの授業をとった。」(S.I.)

「最初、幼保園の子に読み聞かせをすることになった時、他人と話をするのが苦手だったので、結構無謀な挑戦をしたと思いました。」(T.I.)

「私は今まで子どもと接する機会があまりなく、正直子どもが苦手でした。だから、最初の実践は、本当に緊張しました。」(Y.K.)

感想文の中で学生たちが書いているように、「読み聞かせの実践」を受講する学生は、もともと子どもが好きだったり、人前での自己表現を得意とする学生ばかりではない。むしろ、子どもが苦手、人前に立つのが苦手と自覚し、その苦手意識を克服するためにあえて読み聞かせに挑戦する学生がいるのである。

そのような学生にとって、教員と学生を前にしての学内での模擬実践の場はすでに大変な試練の場となり、緊張のあまり言葉に詰まり、立ち尽くしてしまうようなことが時々起こる。先に引用した学生の一人も、模擬実践について次のように述べている。

「私が実践活動より緊張したのは、学校のみんなの前での練習でした。正直に言うと、1番嫌いでした。あのみんなの鋭い視線は忘れられません。」(S.I.)
人前に立つことへの苦手意識を持つ者に限らず、



図2 読み聞かせによる人間力育成の概念図

参加する学生のほとんど全員にとって、模擬実践は、ある意味、修行の場と言える。1年前期のまだお互いによく知らないうちから、子どもたちに向きあう本番と同じように、他の学生の前でお姉さんやお兄さんになりきらなくてはならない。別の男子学生は、「恥ずかしさのあまり逃げ出したかった。」(K.A.)と正直に書いていた。

模擬実践において学生が乗り越えなければいけないのは、演じる自分に対する気恥ずかしさだけではない。仲間からもらうコメントを受容することもそうなのである。

「みんなの前での練習。あれが一番つらかったです。無表情そして棒読み、声が小さいなどのコメント。力のなさを自覚させられました。」(K.A.)

この学生のように、時には仲間のコメントに落ち込むこともある。しかし、ひとたび実践を経験すると、模擬実践でお互いに鍛え合うことは必要だということに、学生自らが気づいていく。「あの子の鋭い視線は忘れられません。」と書いていた学生も、その後、

「しかしお互いに相手の読みをきいて良い点や直したらいい点を書き出すことはよいことだと思いました。あの感想はとても参考になりました。他の人の読みを聞けるこの練習はとても大切なことだと実感しました。」(S.I.)

と述べている。

学内での模擬実践は、交流力を高めることを目指すこの授業において、自分をまず他の学生に向けて開いていく過程として位置づけることができる。この過程を通して、学生の中に、子どもたちに喜んでもらえる実践をともに目指す仲間という意識が育っていくことが学生の感想から伺える。おそらくその仲間意識、そしてそこから来る相互の信頼が、仲間のコメントを前向きに受けとめ、少々の失敗では挫けない心の柔らかさや積極性を育てているのではないだろうか。

2) 子どもを前にしての実践

本当のところ、「子どもに絵本を読むだけで単位がもらえるなんて、楽勝!!」というぐらいの気持ちで

受講する学生もいる。次の学生も、まさにそんな理由で受講した一人である。

「この授業をとった正直な理由は、楽だと思ったからです。ただ絵本を読むだけで2単位も貰えるなんて。そう思っていました。でも、いざ始まって説明を受けてみると聞いただけでつらくなりました。予定表を配られた時もこんなにやるのか、しかも小学校は朝が早くてハードすぎる。苦笑いしかできていなかったように思います。」(K.A.)

他の授業に較べ、時間的にも労力的にも学生の負担はかなり大きく、私たちも「部活動のような授業です。」と学生に説明している。それでも、これまで一人の脱落者も出さず、最後まで全員でやり遂げることができているのは、子どもたちとの交流から得られるものに依るところ大と思われる。子どもたちを前にしての実践について、学生は次のような感想を書いている。

「始めの方は余裕がなくて子どもたちの様子を見ながら読むことはできていなかったと思うけど、子どもたちは本当に静かに楽しそうに聞いてくれました。それだけでとてもうれしかったし、毎回毎回次はもっとがんばらないといけないなあと思わずにはいられませんでした。」(K.H.)

「読み聞かせはみんな集中して聴いてくれてうれしかったです。一番印象に残っているのは、『くるねこかあさん』という絵本を読んだ時の子どもたちの反応です。1～2歳児向けの絵本でとても簡単な短い内容だったのですが、1文読むたびにみんなが復唱してくれて、読みながら驚きました。」(C.T.)

「子どもたちが真剣に聞いてくれるので、読み手の私もどんどん絵本に入り込んで読み聞かせができました。」(Y.K.)

「最初私が思っていたイメージは腕白盛りで結構騒ぐかなと思っていましたが、実際は読み聞かせの時間になると静かに聞く態勢になって驚きました。彼らがお話を聞くときはとても真剣にまっすぐこちらを見ていて、あまりの真剣さにちょっと圧倒されそうになりました。(中略)おはなしレストランはおいしいお話を食べてもらうのですが、お

話しするこちらもなにかおいしいものを貰った感じがします。」(T.I.)

実践では、子どもたちの反応が直接返ってくるので、時にはそれ故の怖さもあるが、それ以上にやりがいを感じると、受講した学生は口をそろえて言う。幼稚園でも小学校でも、学生は自分の読み聞かせにじっと静かに聞き入ってくれる子どもたちの姿に感動し、同時に、読み手として大きな励みももらっているのだ。子どもたちと交流することで得られた喜びと自信は、さらに学生の積極性を高めていくことにつながっていく。

また、子どもたちの素直な反応やじっと耳を傾けてくれる姿に、学生は新鮮な感動を覚えている。そして、その感動の体験が、子どもたちを想いながら絵本をじっくり選んでよく読み込み、子どもたちに誠実に伝えていこうという真摯な姿勢を育てていく。

「2回、3回と実践を行なっていくにつれ、上手に読もうという思いからどう読んだら子供たちは聴きやすいだろうか、物語に集中できるだろうかと常に聞き手側の反応を意識して取り組めるようになりました。絵本の文を声に出して読むことは普通に黙読するのとは違う楽しさがあります。」(N.K.)

子どもたちとの交流を通して、座学だけでは得られない確かな手応えと自分に対する自信を得て、学生たちは、私たちが教室ではなかなか見ることのできない生き生きとした表情を見せてくれる。

4. エリック・カール展「おはなしのへや」

2008年秋、鳥根県立美術館において、「はらぺこあおむし」の絵本で知られるエリック・カールの展覧会(9月19日～11月3日)が開催された。そこで、卒業プロジェクト「おはなしゼミ」の7名と1年生有志2名の計9名は、期間中に読み聞かせのボランティア活動「おはなしのへや」を美術館で行なうこととなった。

日程は、9月28日(日)、10月4日(土)・12日(日)・25日(土)、11月2日(日)の5日にわたって、各日10:30、13:30、14:30の3回、30分ずつの活動を行なった。なお、最終の11月2日は15:30からの活動が加わった。



エリック・カール展での実践風景

学生9名を4～3名の4班に分け、30分の活動を順番に受け持つようにした。30分のあいだに行なうことは、エリック・カールの絵本の読み聞かせ、及び読み聞かせのあいだのつなぎ(ゲーム・歌・指遊びなど)の2項目である。カールのどの絵本を読み、どのようなつなぎを入れるかは、各班それぞれで学生が考えた。つなぎについては、幼稚園での経験を生かしながら、新たな遊びなども取り入れて工夫した。4つの班が取り上げたエリック・カールの絵本は次の通りである。

- A班 「月ようびはなにたべる？」
「パンダくんパンダくん なにみているの？」
「たんじょうびのふしぎなてがみ」
- B班 「10このちいさなおもちゃのあひる」
「ちいさなくも」
「はらぺこあおむし」
- C班 「ことりをすきになった山」
「ゆっくりがいっぱい」
「できるかな？ あたまからつまさきまで」
- D班 「10このちいさなおもちゃのあひる」
「はらぺこあおむし」
「やどかりのおひっこし」
「パパ、お月さまとって」
「こぐまくんこぐまくん なにみているの？」

そのほか事前に用意したのは、エリック・カールのレビュー集とアンケートである。レビュー集は、カールの絵本のうち、学生が読み聞かせに選んだ絵本を中心に12冊の紹介を載せた(図3参照)。アンケートでは、子どもの年齢、読み聞かせやつなぎ、態度・

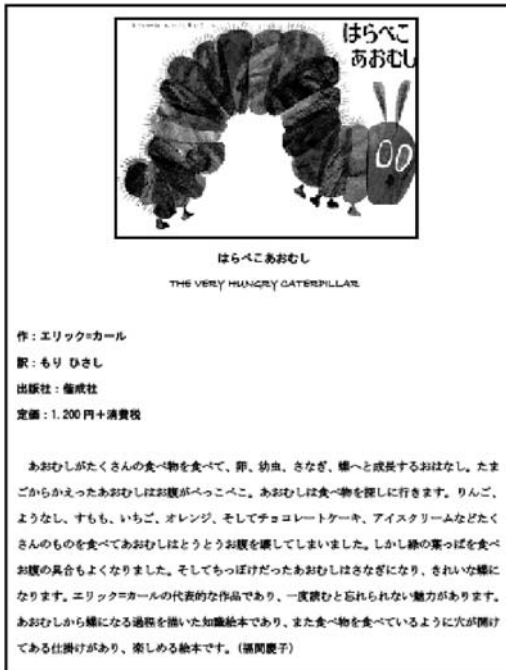


図3 レビュー集の1ページ

マナーについて、記述形式で簡単に答えていただくものを用意した。いずれも来場された方々に配布し、その場でアンケートは回収した。

読み聞かせの会場となる美術館の一室に、事前に何度も学生と足を運び、美術館担当者と打ち合わせを行ない、部屋の飾り付けも学生たちの手によって

なされ、いよいよ「おはなしのへや」の本番を迎えることとなった。

各回の入場者数については表2の通りである。1回の入場者数の平均は約74名、述べてして1,200名近くの方々に足を運んでいただいた。

それでは、「おはなしのへや」の様子について、まずはアンケートをもとに振り返ってみたい。

はじめは、学生も大勢の方を前にして、しかも子どもだけでなく大人もたくさんという幼保園や小学校とはまったく異なる雰囲気の中で浮足立ち、「まちがえてもいいので、もっと堂々とすれば大丈夫だと思います。」「緊張されていたのが少し硬かったので、もう少しやさしく読んでほしい。」「もうちょっとリラックスしてご自身達が楽しめるようになると良いですね。」「などの意見を多くいただいた。」「もうちょっと練習してください。」「といった単刀直入な意見もあって、学生たちもこれではいかんと奮起して、次回までに各班で練習を行ない、絵本の選定のし直しやつなぎの改善をした。その甲斐もあって、「しっかり練習が重ねられている様子が伝わって安心して見てもらえました。」「たくさん練習されてる印象を受けました。これからもがんばってください。」「などの意見をいただくことができるようになり、学生の自信にもつながった。また、回を重ねるにしたがって学生が子どもたちに自然に歩み寄るようになり、「開演前・

表2 「おはなしのへや」入場者数

島根県立美術館調べ

	10:30~11:00	13:30~14:00	14:30~15:00	15:30~16:00					
9月28日	大人	34	大人	31	大人	21			86
	子ども	32	子ども	24	子ども	19			75
10月4日	大人	36	大人	28	大人	31			95
	子ども	30	子ども	16	子ども	29			75
10月12日	大人	40	大人	34	大人	49			123
	子ども	41	子ども	29	子ども	27			97
10月25日	大人	52	大人	39	大人	32			123
	子ども	48	子ども	29	子ども	25			102
11月2日	大人	40	大人	50	大人	77	大人	57	224
	子ども	40	子ども	34	子ども	62	子ども	45	181
		393		314		372		102	1181

後もすすんで子供と交流されていてとてもよかった。」
「子供が一人でカーペットに座った時に、はじまるまで相手をして頂き助かりました。ありがとうございました。」などの意見をいただくようになった。

アンケートを読みながら意外だったのは、「子供をあきさせないように工夫してあって楽しめた」「次の絵本につながるような遊びが取り入れてあってよかった」など、読み聞かせの合間に、つなぎとして手遊びなどを入れていること自体を評価する声だった。読み聞かせとつなぎの組み合わせは以前からしていたことなので、こちらとしては普通の感覚だったが、ご来場の方々の多くの目には新鮮に映ったのかも知れない。

エリック・カール展での実践風景



そのほか、絵本の読み方や子どもの座らせ方などの意見に混じって、次のような感想も見られた。

- ・いつもは読んであげる方で、自分が「絵を楽しむ」という感じが無いのですが、今日は、私の方が、ゆっくり楽しんでいました。
- ・人に読んでもらうことの“こちよさ”を知る事ができました。
- ・あらためて絵本は子どもだけでなく大人にとって面白いと思いました。

絵本、そして絵本の読み聞かせが、けっして子どもたちのためだけにあるのではないことを、感想を読みながら改めて感じた次第である。

それでは次に、「おはなしのへや」を終えての学生の感想である。

学生が口をそろえて言ったのは、やはり不特定多数を前にしての緊張と戸惑いだった。時には100名

を超える老若男女を相手に、緊張するなというほうが無理かも知れない。子どもに限ってみても、やっと立てるくらいの子どももいれば、分別も大体つきそうな小学生の子どももいるのである。学生たちは、それらの人々にむけて1冊の絵本を開き、反応を見ながら時に手ごたえを感じ、時にはがっかりすることもあったようである。しかし、たとえがっかりした時でも、絵本を選びなおして次に臨むことを忘れなかった。学生の一人は、「絵本は読み手の自己満足で選んではだめ。読み聞かせは読み手と聞き手の両方で作るものだ。それがよくわかった。」と言った。

「おはなしのへや」では、エリック・カールの代表作「はらぺこあおむし」のみ大型絵本を使用した。はらぺこあおむしがたくさん食べて、おしまいには、見開き一面に描かれた見事な蝶に変身する。ページをめくって蝶があらわれた瞬間、会場から溜息ともどもめきともつかない声があがる。これは、いつでもそうだった。そこには子どもの声だけでなく、大人の声も混じるのである。それを聞きながら、学生たちは絵本の持つ力を改めて実感したという。

この活動を通して、学生たちの心に強く残った方々がいる。一人目は、一人でいらしていたおじいさん。「孫に読むのに、いい参考になりました。」と学生に言い置いて帰られたそうである。次に、耳の不自由なご夫婦。「おはなしのへや」の会場を覗かれたそのご夫婦に、学生は何もうまく伝えることができなくて悔しかったらしい。それから車椅子に乗った男性。「おはなしのへや」に2回も来ていただいた。そして、長い時間をかけてアンケートに記入していただいた。そこには、「まん才ふうでおもしろかった」と書いてあった。アンケートをいただいた後、学生の一人がその方の車椅子を押しお送りしたのが印象的だった。これらの出会いも、この実践を通じた貴重な交流のかたちである。

さて、それでは私たち教員から見た学生たちの姿はどのようであったか。実はこの活動をするにあたって、最初は甚だ不安のほうが大きかった。美術館でのボランティアの話が舞い込んできた時も、学生も喜んではいらぬようなのだが、実現するためには何をしたらよいのか、具体的な一歩が踏み出せない。教

員が指示を出せば動く。出さなければ動かない。正直情けなかった。そこで、会場の飾り付けが始まる頃から、私たち教員はあえて口を出さないようにした。すると、学生たちの動きに変化が見え始めた。来場者の方々の誘導やプラカードを持っての宣伝など、自分たちで動き出したのである。担当の学芸員の方も、これには感心しておられた。こんな象徴的な出来事があった。「おはなしのへや」の実践もすべて終了し、テーブルを囲んで一息入れた後、学生たちは、さも当然のこのように、部屋の後片付けに取り掛かったのである。誰の指図を受けるわけでもなく、すべての飾り付けを外し、見事原状復帰をやり終えた。学生に自主性がないことを心配していた私たちが、杞憂であったようである。むしろ私たち教員が口を出しすぎて、かえって学生の主体性を抑え込んでいたのかも知れない。

30分間の実践そのものについても、回を重ねるに従って学生が成長していく様子を見ることができた。親御さんへの連絡や子どもの予期せぬ言動に対する対処など、余裕をもってふるまい、スムーズな流れの中で楽しく充実した30分をつくりあげる。中には、そういう理想にかなり近いところまでいった班も出てきて、その出来栄の良さに教員ふたりで顔を合わせたこともあった。一般の方々を前にしての実践で、学生たちはひと回りもふた回りも遅くなったように思う。

今回の島根県立美術館での読み聞かせ活動に際しては、美術館主任学芸員上野小麻里様、左近充直様をはじめ、関係者の皆様にお世話いただいた。このような貴重な体験をさせていただき、心より感謝申し上げます。

5. おわりに

絵本の読み聞かせを授業化して3年、これまでの活動を振り返ってみて、活動の裾野をたんに広げただけでなく、学生の交流力が育っている手応えを感じることができる。その意味では、この取組の目標はある程度達成できていると言ってよい。しかしながら、いくつかの課題も見えてきた。

1つには、読み聞かせの方法等について書かれた文献は多く存在するものの、その多くが個々の読み聞かせの経験に基づいて書かれていて、理論的な蓄積がなされていないことが挙げられる。読み聞かせに関する様々な文献が様々な存在し、それらを頼りにしながら個々の読み聞かせの実践に活かしているというのが現状である。

もう1つには、読み聞かせの活動に取り組んでいるグループは大学が立地する松江市にかぎってもいくつか存在しているが、横のつながりが希薄で、情報の交換が十分ではないことである。

今後は、読み聞かせの実践をこれまで同様に蓄積することに加え、ばらばらに存在する絵本の読み聞かせの理論・方法の整理・体系化を試みること、学生を含め読み聞かせに携わる各グループがつながりを持って、お互いの活動を高めあうような関係を築くこと、この2点が強く望まれる。

それによって絵本の魅力や読み聞かせの意義もより一層明らかとなり、学生や一般市民の方々の読み聞かせに対する理解も深まることが期待される。

注

「学びの仕掛けとしての『読み聞かせの実践』 - 小児科病棟におけるボランティア活動からの始まり -」
2007年3月、島根女子短期大学紀要第45号

(平成20年11月10日受稿,平成21年3月4日受理)